

承空本『小野篁集』注釈の試み (3)

－漢籍教授に身が入らない篁の場面－

松野 彩

【キーワード】 小野篁、小野篁集、篁物語、承空本

一、はじめに

『小野篁集』(別名『篁物語』)は小野篁(802~852年)を主人公とした物語である。作者は未詳で、成立時期は説が分かれるが、筆者は平安後期(11世紀末)~平安末期(12世紀末)と推定している¹。

この『小野篁集』の現存最古の写本である承空本²は、鎌倉時代後期に書写されたものだが、この写本を底本とした注釈書はこれまでに存在しない。そこで、筆者はこれまで「承空本『小野篁集』注釈の試み(1) 一篁と異母妹との出会い³」や、「承空本『小野篁集』注釈の試み(2) 一篁と異母妹の出会い(後半)・師走の月夜の場面⁴」において、注釈・現代語訳を試みてきた。

本稿はそれに続く「漢籍教授に身が入らない篁の場面」、すなわち、篁が異母妹への漢籍の教授をしばらくしていないことに気づいた父に呼び出され、漢籍を教えるが、異母妹への思いばかりが頭を占めて教え間違いをする、そして、角筆を使って和歌の贈答をする場面について注釈・現代語訳を試みる。

以下、本文、略記号一覧、注釈、現代語訳の順に提示する。

二、承空本・本文 3

以下の承空本『小野篁集』の校訂本文は、中村一夫「承空筆『小野篁集』による校訂本文作成の試み」(『国士館人文学』第8号[通巻50号]、2018年3月)による。

なお、本稿で使用している中村による校訂本文には記載されていないが、和歌には(和泉)に従って通し番号を付した。なお、(和泉)⁵では、登場人物ごとに数字の表記で区別しているが、本稿では便宜上、①②などの表記に統一した。

1 さて、あしたに、^{ひさ}久しう書読ませざりければ、^{ちいぬし}父主、「あやしう^{たかむら}篁が見えぬかな」

- 2 と言ひて、呼びにやるに、おどろきて、例の書かき集めて教へけるままになむ、
- 3 この女のみ心に入りて、僻事をのみなむ、しける。かう教ふる中に、角筆して、
- 4 「かやうの物の書は、僻事つかまつらむ。この頃はもの覚えずや。
- 5 〔⑧篁〕君をのみ思ふ心は忘れられず契りしことも惑ふ心か
- 6 返し、
- 7 〔⑨女〕博士とはいかが頼まむさとられずもの忘れする人の心を
- 8 又、男、
- 9 〔⑩篁〕読み聞きてよろつの書は忘るとも君一人をば思ひもたらむ
- 10 かくて、この男は、てふくみをぞ常に作りかへりける。

三、略記号一覧

注釈を施すにあたって、以下の注釈書を参照・比較した。なお、注釈書は、初版の時期が古いものから順に並べた。

・注釈書

- (校註) 宮田和一郎著『校註篁物語 校註海人刈藻ほか』(爾保布廼園、1936年)、以下の(和泉)に所収。
- (新校) …宮田和一郎著『新校篁物語』(爾保布廼園、1936年)、以下の(和泉)に所収。
- (新釈) …宮田和一郎著『新校篁物語』(健文社、1948年)、以下の(和泉)に所収。
- (河出) 西尾光雄・秋山虔・池田彌三郎・松尾聰『現代語譯 日本文學全集 更級日記・平中物語・篁物語・堤中納言物語』(河出書房、1954年)
- (朝日) 山岸徳平 校註『日本古典選 平中物語・和泉式部日記・篁物語』(朝日新聞社、1959年の新装版、1977年)
- (岩波) 遠藤嘉基・松尾聰校注『日本古典文学大系 篁物語 平中物語 瀨松中納言物語』(岩波書店、1964年)

- (武蔵) 石原昭平・根本敬三・津本信博著『篁物語新講』(武蔵野書院、1977年)
 (全釈) 平野由紀子『私家集全釈叢書3 小野篁集全釈』(風間書房、1988年)
 (和泉) 平林文雄・水府明徳会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』(和泉書院、2001年)

校異にあたって参照した写本は以下の通りである。【承】の影印は、『承空本私家集〈上〉』(冷泉家時雨亭叢書、2002年)を参照し、【書】【甲】【乙】については、上記の(和泉)に所収の影印を参照した。

・写本

- 【承】 承空本『小野篁集』
 【書】 宮内庁書陵部蔵『小野篁集』
 【甲】 水府明徳会彰考館蔵『篁物語』(甲本)
 【乙】 水府明徳会彰考館蔵『篁物語』(乙本)

四、注釈

以下の○1、○2などの表記は、第二節の校訂本文の行数を示している。

○1 さて、あしたに

「あした」を(A)「翌朝」と解釈するのが(校註)(新釈)(河出)(岩波)(和泉)、(B)ある日の「早朝」と解釈するものが(武蔵)(全釈)である。(全釈)の「何日か篁が姿を見せぬ日が続いての朝なのであるから、篁が妹と満月を見た夜の翌朝とは考えられない」としているのに従い、(B)で解釈する。

○1 ^{ち、ぬし} 父主

「父主」は篁と異母妹の父、小野岑守(778～830年)。平安時代初期の文人で、人生で最高の官位は従四位上参議である。嵯峨天皇の侍読を務め、漢詩文は『凌雲集』『文華秀麗集』などに収載されている。『日本後紀』の編集にも関与した。

○2 「おどろきて」

本文が【承】【書】(全釈)「おとろきて」(=驚きて)と、【甲】【乙】(校註)(新校)(新釈)(朝日)(岩波)(武蔵)(和泉)⁶「お(を)とこきて」(=男来て)に分かれる。解釈はどちらでも可能であるが、【承】の本文に従うと、(全釈)「おどろく」は、「はっと気がつく」の意で、この動詞によって、うつつとした恋情を抱き、夜とも昼ともわかずぼんやりして何も手につかぬ篁の日頃の状態が、照らし出さ

れるといってもよい」のように解釈できる。

○3 この女のみ心に入りて

「女のみ心」の部分の表記は、【承】【書】「女のみ心」、【甲】【乙】「女のみこゝろ」となっているが、いずれの本文を採用するにしても解釈は以下の(A)(B)の2種類に分かれる。品詞分解すると、(A)「女」+「のみ」(副助詞/強調・限定)+「心」と、(B)「女」+「の」(格助詞)+「み」(接頭語/敬意)+「心」となる。(B)の解釈を提案するのは(武蔵)で、『小野篁集』の会話文に「御心」の用例があることを根拠としているが、この部分は地の文である。地の文において「妹」に対して敬語が使われている例を確認すると、第1部で妹に対して敬語が使われている例は、「かかることを母おとど聞き給ひて、ものも宣はで、うかがひ給ひて、向ひ給ひたりけるを、手を取りて引きもて行きて、部屋にこめてけり。」⁷の1例があるが、この例は、妹に対して単独で用いられているのではなく、篁と妹の2人に対して使用されている。したがって、(B)説での解釈を取るの⁷は妥当ではないと考えられる。(A)は「のみ」によって、強調・限定の意味が加わることから、「のみ」がない本文よりも篁の恋の想いの強さが強調された表現になっていると言える。(A)で解釈する。

○3 ^{ひが}僻事をのみなむ、しける。

「僻事」は「道理に合わない事柄。間違った事柄。心得違いのこと。不都合なこと。」(日本国語大辞典)で、ここでは、漢籍を教授するさいにした間違いをさす。

○3 ^{をし}かう教ふる中に、^{かうひち}角筆して、

角筆は、初学者が漢籍を学習するときに、文字を指し示すために用いたとされる筆である。竹や木、象牙などでできた箸のような形状の棒で、片側の先端は筆のように尖っている。⁸

○4 かやうの物の書^{ふみ}

本文は、大きく分けて(A)【承】【書】「かやうの物のふみ」と、(B)【甲】「かやう初のふみ(本マヽ)」【乙】「かやう初のふみ」に分かれる。(A)の本文を支持するものは(校註)(朝日)(武蔵)(全釈)(和泉)、(B)の本文を支持するものは(新校)(新釈)(岩波)⁹となっている。

(A)の「物の書」は書物のこと、大学寮に所属している篁が教えているのは漢籍なので、「このような漢籍」と解釈できる。(B)の場合「初歩のテキスト」という意味で解釈できれば読解可能だが、ジャパナレッジで小学館の『新編日

本古典文学全集』の中古の用例を検索したところ、「初めの」「始めの」で初歩のという意味で解釈できる例はなかった。(河出)はこの部分について原文を掲載せず「久しぶりの読み初めは」と解釈しているが、「久しぶりの」など原文にない言葉を補っている。(岩波)については、本文は(B)だが(A)で解釈している。この部分、(B)での解釈は困難であり、(A)の本文によって「このような漢籍」と解釈するのが妥当である。

○10 この^{おとこい}男は、てふくみを^{つね}ぞ^つ常^返に作りかへりける。

(1)「^{おとこい}男は、てふくみ」と(2)「^つ作りか^返へりける」の部分にそれぞれ異同がある。
(1)(2)の順に確認する。

(1)「^{おとこい}男は、てふくみ」

写本レベルでは、(A)「いてふくみ」とする【承】【書】、(B)「はてふくみ」とする【甲】【乙】に分かれる。(A)(B)どちらも解釈は不可能で、未詳とする注釈書がほとんどであったが、¹⁰(岩波)は補注で「く」は「ふ」の誤りであるとして「てふふみ(=甲文)」と解しており、『文選』の目録に記された文体の名の一つであるとしている。この説を支持するのは(全釈)(和泉)である。一方、(武蔵)は「てふみ」の読み違いの可能性を指摘して、「手紙の手蹟や内容」ぐらいの意」と解釈している。

これらの説を踏まえた上で、本稿では、【承】の本文をできるだけ校訂せずに解釈する方針であることから、「く」の1文字のみを削除し、「男居て、ふみ」という本文を提案する。【承】の本文はカタカナで書かれており、「フ」「ク」の形状はよく似ていることから、誤って同じ文字を2回書いてしまったという可能性があると考えからである。

(2)「^つ作りか^返へりける」

写本レベルでは、(a)「^つつくり返ける」【承】【書】と(b)「^つつくりかへける」【甲】【乙】に分かれる。(b)の場合、「作り変えたのだった」となり、角筆を使って漢籍に書かれた文字を作り変えて和歌にして、篁と異母妹は交流をはかっていたということになる。一方、(a)の場合、「返」を「かへり」と読むと文意が通じない。しかし、「かへし」と読めば、「(漢詩を)作り、(異母妹に)返事をした」となる。

五、現代語訳

第四節の注釈を踏まえて、できるだけ承空本に忠実に訳したものが、以下の現代語訳である。番号は第二節に示した本文の行数を示している。

- 1 さて、(ある)早朝に、しばらく(篁が異母妹に)漢籍の勉強をさせなかったので、父君が、「不思議と篁(の姿)が見えないね」
- 2 と言って、呼びにやると、(篁は)はっと気づいて、いつものように漢籍をかき集めて教えているうちに、
- 3 この女(異母妹)のことばかりが気にかかって、間違いばかりをするのであった。このように教えているうちに、角筆で、
- 4 「このような漢籍は、(間違はずはないのに)間違いをするのだろう。この頃は、(恋の思いで)正気ではないのですよ。
- 5 〔⑧篁の歌〕あなたのことばかりを思う心は忘れることができず、(あなたと)約束したことについても思い乱れる(私の)心ですよ。」
- 6 (異母妹の)返した歌、
- 7 〔⑨異母妹の歌〕(あなたのことを)博士だとどうして頼りにしましょうか。(私の気持ち)を察知できず(約束までも)物忘れするあなたの心なのですから。
- 8 また、篁(が詠んだ歌)、
- 9 〔⑩篁の歌〕読んだり聞いたりしてきたすべての書物(の中身)は忘れても、あなた一人のことは思い続けるでしょう。
- 10 こうして、この男(篁)は座って常に漢詩を作り、(異母妹に和歌で)返事をしたのだった。

六、まとめ

本稿では、承空本『小野篁集』の、異母妹への恋の思いのために漢籍教授に身が入らない篁が描かれた場面について、先行論を踏まえて注釈をほどこし、現代語訳を行ってきた。

その作業の過程で見つかった、解釈に相違が出るような本文異同は以下の4例(下線部)で、これらはすべて、【承】【書】の本文、【甲】【乙】の本文がそれぞれ一致¹²していた。

- 2 おどろきて
- 4 かやうの物の書^{ふみ}
- 10(1) この男は、てふくみをぞ
- 10(2) 作りかへりける^{つく}^返

これらのうち、○10(1)のみ【承】の本文を1文字校訂したが、その他は【承】のままの解釈が可能であった。しかし、他の写本に比べてすぐれていると断言する根拠も見いだせなかった。

今後、承空本の位置づけを考える上では、より広範囲にわたって他の写本の本文との相違を分析するが必要である。残りの部分についても、順次、作業を進めていく予定である。

〈注〉

- 1 成立時期について、筆者は「角筆」「搔練」などの言葉を手がかりに、『篁物語』の成立時期を平安後期（11世紀末）～平安末期（12世紀末）の約100年の間ではないかと推定している。詳しくは、拙稿「『篁物語』成立年代再考―「角筆」を手がかりとして―（『篁物語』の総合的研究（1））（『国士館人文学』第7号〔通巻49号〕、2017年3月）、「『篁物語』成立年代再考（2）「搔練」を手がかりとして（『篁物語』の総合的研究（2））」（同・第8号〔通巻50号〕、2018年3月）を参照。
- 2 鎌倉時代後期の浄土宗西山派の僧侶、玄観房承空が筆写した写本のこと。承空は冷泉家とは遠縁にあたり、写本は現在、公益財団法人冷泉家時雨亭文庫に保管されている。承空の詳しい来歴については仁藤智子「歌僧・承空の基礎的考察-『篁物語』書写の歴史的背景-」（『国士館人文学』第9号（通巻51号）、2019年3月）を参照。
- 3 拙稿「承空本『小野篁集』注釈の試み（1）―篁と異母妹の出会い―」（『国士館人文学』第12号〔通巻54号〕、2022年3月）。
- 4 拙稿「承空本『小野篁集』注釈の試み（2）―篁と異母妹の出会い（後半）・師走の月夜の場面―」（『国士館人文学』第13号〔通巻55号〕、2023年3月）。
- 5 平林文雄・水府明徳会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』（和泉書院、2001年）。本稿では第三節の「略記号一覧」で示すように、（和泉）の略記号で示す。
- 6（河出）は原文を掲載していないが、【甲】【乙】の本文を底本にした解釈をしている。
- 7 本文の引用は（和泉）P214による。
- 8 注1の2017年発表の拙稿および、注3の拙稿のP83～84参照。
- 9 後述するように、（岩波）は、本文は（B）に従っているが、（A）で解釈している。
- 10（岩波）補注には、「『新講篁物語』（菊田茂男）が、「いてふは、移・牒（いずれも役所の間で往復する文書）のことか」と述べているのを除けば、諸注すべて未詳である。」とある。
- 11「○3 この女のみ心に入りて」は表記の異同のみで、解釈が連動しているわけではないので、ここでの「解釈に相違が出るような本文異同」には入れなかった。

12 「○4 かやうの物の書」の部分は、【甲】【乙】の本文は一致しているが、前述したように、【甲】は「かやう初のふみ（本マゝ）」となっており、注が傍記されている点が【乙】と異なる。